

中国のほんの話 (43)

北京書肆再訪 ～2008年夏、北京～

蔭山 達弥



2002年以来、6年ぶりに訪れた北京は、オリンピックの開会式まで6日に迫っていたこともあって、街中至るところに巨大な看板が設置され、標語が書かれた垂れ幕が下がり、華やいだ雰囲気の中、人々は活気に満ちていた。地下鉄の車内に設置されているテレビからは聖火リレーの様子が映し出され、駅構内の壁面には飛び込みや、陸上、バスケットボールなどの中国人選手の特大のポスターが貼られていた。

だが、6年前に足繁く通った馴染みの書店を訪れると、店内にクラシックのピアノ曲が流れる中、オリンピックには全く無関心の、ひたすら店頭で置かれている本の品定めに没頭している人たちがいた。

北京で書店といえば、目抜き通りの王府井通りにある「新華書店」や、地下鉄西单駅を降り地上に出たところにある「北京図書大厦」が有名だが、平日、日曜日を問わず客でごった返して、落ち着いて本を選ぶこともなかなかできない。その上、店内の床に座り込んで立ち読みする人（特に子供や若者）が多くて、時々店員が、巡視しているが、見たい本も見られない時が間々ある。

今回、筆者が最も多く立ち寄ったのが、美術館近くにある「三聯韜奮図書中心」（写真）だ。店内は地下1階、地上2階で、著名な芸術家、映画監督や学者がよく立ち寄ることで知られている。繁華街から少し離れたところがあるので、ゆっくりと本を選ぶことができるのが良い。2階の美術や写真関係の本が置かれているコーナーは、平台に並べてある本のセンスの良さもさることながら、見本以外の商品がビニールでパックしてあり、手垢のついていない新品が買えることや、高額な美術書でも他店のように鍵のかかっているガラスケースに入っておらず、自由に見ることができているのが大いに気に入っている。地下1階には自社の「三聯書店」コーナーがある他、人文関係の良書を多く取り揃えている。「三聯韜奮図書中心」と通りを隔てた西側には、小さな美術書の専門店があるので、一度立ち寄ってみた。店員はすべて女性で、商品は1割引してくれた。筆者はこの店の店頭飾ってあった、著名画家何家英の特大の画集を買った。

地下鉄2号線和平門駅で降り、南へ少し歩くと、書画・骨董・印材などを扱っている店が軒を連ねている「瑠璃廠」がある。その手前に新刊書と古書の両方を取り扱っている「中国書店」がある。この店では、古典文学や古代哲学関係の高価な糸綴じ本を多く取り扱っている。しかし、観光客が多く訪れるので、切り絵や毛沢東のトランプ、北京の絵葉書など面白い物も多く売られている。筆者が最初に訪れた時は、土曜日にも拘わらず、オリンピック開会式の翌日だったせいか、通りは閑散としており、書画用品の客引きに度々声をかけられた。判子を彫ってもらいたい人や、書道用品を買いたい人は「瑠璃廠」を一度訪れると良い。

さて、目抜き通りの王府井に戻ろう。中国音楽のCD、映画やドラマのDVDを買いたければ、西側にある「外文書店」がお薦めである。エレベータで上がると音像関係の階に到着。店員は商品に詳しく、混んでいないので、じっくりと選べる。王府井の教会を越え、さらに北に進むと、向かって東側に「商務印書館涵芬楼」がある。地下1階の人文関係の店内では、他の店では見かけなかった本が数多くあり、日本にも度々訪れている作家・莫言の文集を見つけたのは、大きな収穫であった。

最後に、中国の本は紙質も日本とは異なり、重量の少ない本が最近増えたが、高価な美術書などは結構重く、時間があれば国際郵便局から小包（SAL）で別送するのが得策だ。

かげやま たつや（教授・中国文学）